

ウンシュウミカン果実の多湿処理期間と浮皮発現

河瀬 憲次・吉永 勝一・内田 誠

(果樹試験場口之津支場)

秋期の多湿条件はウンシュウミカンの浮皮発現を助長するといわれる。しかし、その時期及び期間の詳細については明らかにされていない。したがってこれらを明らかにし浮皮防止対策の資とするため検討を加えた。

1. 試験方法

供試樹は7年生(1975)、8年生(1976)のシルバーヒル温州を用いた。多湿処理はポリエチレン袋(0.03×130×170mm)を1果ずつかけて果実周辺を高湿度に保つ方法を取り、処理期間に応じて被袋と除袋を行った。1975年の場合、処理期間は20日、40日、60日を目標として時期別に前期(9月29日～10月20日)、中期(10月21日～11月10日)、後期(11月10日～12月5日)、前中期(9月29日～11月10日)、中後期(10月20日～12月5日)、全期(9月29日～12月5日)及び全期間無処理の7区を設けた。1976年は前年の後期区にしぼり、処理期間を10日に短縮させて3回、延べ30日の全期と無処理の5区を設けた。採収はほぼ完全着色をまって'75年12月5日、'76年12月10日に実施、主として浮皮発現に関係のある項目につき調査した。なお浮皮果は手ざわりにより無軽中甚の4段階で評価したのち、問題の多い中と甚の含まれる割合を浮皮果率とした。

2. 結果および考察

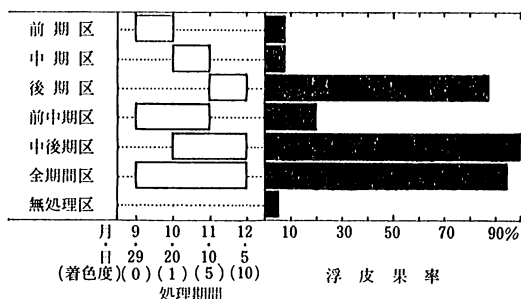
1975年の結果では時期別に20日間ポリ被袋処理をした場合の影響は後期区にのみ現われ、明らかに果実比重は軽く、浮皮果率は高くなった。40日間処理では前中期区は波皮を助長したが軽く、中後期区は着色の遅延、果実の肥大、果実比重の低下、浮皮果率の増加等が明らかに認められた。すなわち、5分着色期(11月10日)以降採収に至る期間のポリ袋がけによる多湿処理は浮皮発現を助長する。したがって果面の乾燥促進効果が期待される炭酸カルシウム水和剤の散布適期は着色初期と考えられる。

1976年は前年の試験成績から採収前30日以内にしぼ

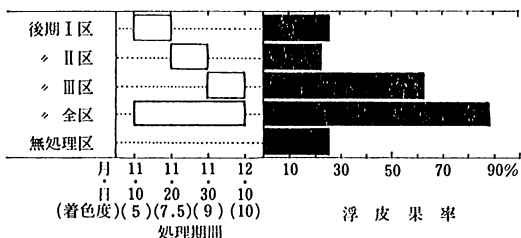
て検討したが、10日間の処理で浮皮を助長させたのは採収前10日、つまり完全着色期に至る10日間が最も処理に敏感であった。採収前30日間処理した区は著しい浮皮となった。

以上の結果から、浮皮果は完全着色期に近づくとき短期間の多湿条件でも激増する可能性があり、さらに長期間にわたれば浮皮の程度は増大することが考えられる。したがって採収が遅れる場合には炭酸カルシウム水和剤の再度散布も必要となる。

本試験はポリエチレン被袋による多湿処理の方法をとったが、日中は高温で推移するなど、必ずしも多湿要因に限られていないことから、実験の手法を変えて追試し、確認する必要がある。



第1図 秋期の多湿処理期間と浮皮発現



第2図 成熟期の多湿処理期間と浮皮発現